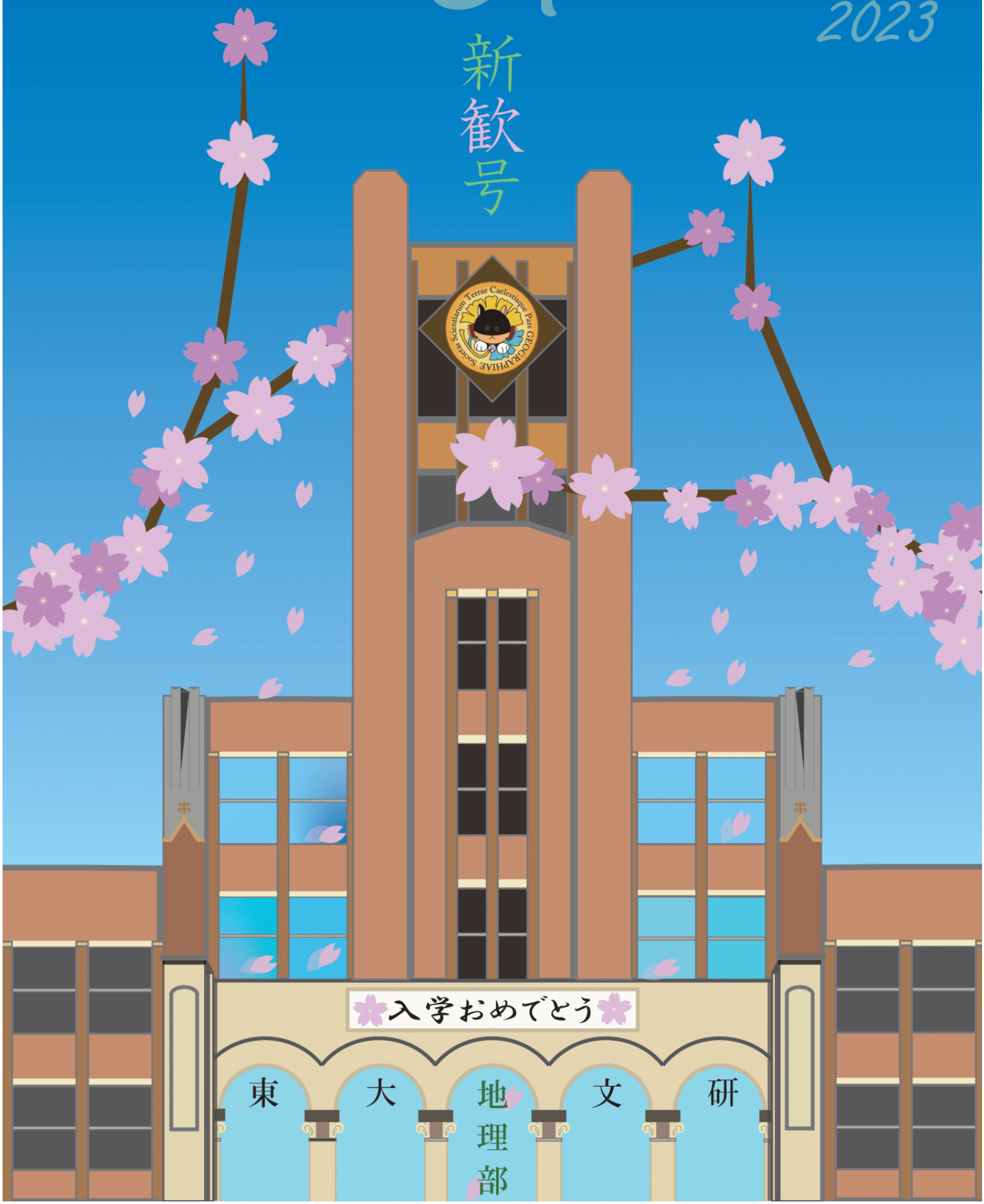
LONGRUN

2023

新歓号



はじめに

72 期編集 芝田

まず、大学入学おめでとうございます！そして、この冊子をお手にとってくださりありがとうございます。

これは、読者の皆さんに東京大学地文研究会地理部の活動をより詳しくお伝えするために作ったものです。

「受験地理みたいなことするの？」「論文でも書くの？」「そもそも地文って何だし」とお思いの方がどれだけいるかはなんとも語れませんが、そういう方もそうでない方にも、団体名やごく短時間での PR では伝わらない活動内容と地理部の醍醐味をお見せできればと存じます。

目次

はじめに 1
部長あいさつ 2
地理部の巡検について 3
地図作業について 4
夏合宿 2022 5
本厚木巡検 36
編集後記 51

部長あいさつ

皆さんこんにちは！ご入学おめでとうございます。地理部 72 期部長です。地理部に興味をもっていただき、ありがとうございます。

地理部では主に、巡検・地図作業・地理部で語る会・合宿と 4 つの活動を行っています。合宿は長期休暇を中心に東京を離れて旅行に行くもので、新歓期にはそれ以外の 3 つを新入生向けに開催しています。

地図作業は、おしゃべりや時にボードゲームも挟みながら、学園祭で展示する立体日本地図をみんなで制作します。部員同士の憩いの場です。語る会は様々な部員の得意分野の解説が聞けます。毎回学びが多く、楽しいですよ。どちらもぜひお気軽にご参加ください。

そして、地理部が最も力を入れている活動が巡検です。東京近郊の各所で、企画者の解説を聞きながら街歩きをします。“タモリのいない『ブラタモリ』”と言えば、伝わりやすいでしょうか。私は地理部の巡検に魅了されて入部を決め、部員になってからも積極的に巡検に行き続けていたら、気が付いたら部長になっていました(笑)。今まで気にも留めていなかったような周りのなんてことない風景が、巡検で聞く解説を通じてガラッと一変、大きく意味をもつようになります。「この景色にはこんな意味があったのか！」「この場所にこんな秘密が隠れていたのか！」さまざまな街に対する見方が、きっと大きく変わりますよ。私たち地理部員と一緒に、東京のまちで新たな発見をしませんか？

まずは一度、新歓企画に参加して地理部の雰囲気を掴んでみてください。巡検は土日と平日の 4 限後に、地図作業は平日 5 限後に、語る会は平日・土日の夜に開催しています。ぜひこの新歓期間、地理部に限らずさまざまなサークルの新歓に参加して、楽しんでくださいね。

それでは地理部の活動で皆さんとお会いできるのを楽しみにしています。この後に続く LONGRUN 本編も、ぜひお楽しみください。

地理部 72 期部長 水谷玲太

地理部の巡検について

72 期編集　芝田

地理部の活動には、「巡検」「地図作業」「語る回」「合宿」等がありますが、ここではその中でも開催頻度が高く地理部の肝と言っていい巡検について説明しようと思います。そもそも地理部以外で巡検という単語を聞いたことがないという方もいるのではないでしょうか。ひょっとして読者の皆さんの語彙を舐めすぎている…？

これは、授業終わりや週末に部員の企画のもと説明を聞きながら一定のテーマに沿った地域を歩くというイベントです。地理部員には一人で諸地域を歩いて巡ることを楽しむ部員もいますが、集団で歩くというところがポイントです、

その本質がどこにあるか、というのはたぶん人によって異なります。同行者と話し仲を深めること、その地域についての知識や思い入れが伺える企画者の解説、あるいは解説では言及されずとも自分で出会える予想もしない景色や発見など。初めて歩く地域はもちろん、慣れ親しんだ地域であっても、多様なバックグラウンドをもつ部員の話により全く違う表情を見せてくれます。

具体的にどこに行っているのか、と申しますと、昨年は以下の巡検を実施しました。

第 43 回山手線一周巡検
駒場巡検 2022
羽田空港巡検 2022
本郷巡検 2022
皇居一周巡検 2022
ベイエリア巡検 2022
（以上新歓巡検）
生田よみうり巡検
横須賀ベイエリア巡検
東急世田谷線巡検
呑川巡検 2022
都市計画巡検 in 相模原
野辺山巡検
諏訪湖巡検
新宿巡検 2022
小石川巡検
七沢・森の里巡検
霞ヶ関巡検 2022
浦安巡検 2022（前編）
下河原線巡検
成田空港巡検 2022
鳩ヶ谷・川口巡検
多摩ニュータウン巡検 2021
夜の代々木･神宮巡検
冬の国立巡検
市川巡検

多摩ニュータウン巡検 2022
東京タワースカイツリー巡検
千葉巡検 2023
金沢・鎌倉巡検
幕張･千葉ベイエリア巡検
広島建築巡検
熱田台地巡検
宝塚・仁川巡検
日立巡検
いわき常磐炭田巡検
赤羽さくら並木巡検
荒川区巡検

これを見ると、実施場所は関東が多いですが、遠方巡検（長期休み中に設定されました）も 5 つほど立っていることがわかります。実に 1 年間で 37 本の巡検があり、また遠方巡検を除いて全て複数日程実施されているので、ほぼ毎週末何らかの巡検が行われているというペース感になります。

巡検の企画･参加は完全に任意です。企画しないで参加だけしていても何の問題もありません。現に私がそういう関わり方をしていますし、土日に時間ができる事がわかったら気軽に参加できるような設定になっています。

本冊子には、昨年行われた「本厚木巡検」の実施報告記事を記載しています。諸事情により 1 年以上前に開催された巡検なのですが、これを読んで「巡検っておもしろそう！」と思ってくださった方は、ぜひ 4 月～5 月にある新歓巡検に申し込んでみてください。

地図作業について

72 期地図長

地理部では主に 2 つの活動をしています。1 つは言わずもがな巡検ですが、もう 1 つの活動が地図作業です。地図作業では地理院地図と発泡スチロールを用いて日本各地の立体地図を制作しています。中でも先輩方が代々制作してきた立体日本地図は壮大です。現在は渋谷をはじめとする東京の地図を制作しています。活動に参加するにあたり特別な技能は必要ありません。また活動中常に地図作業をしている訳ではなく、度々リクリエーションも行います。地図作業は部員同士が落ち着いて話をすることができる絶好の機会です。参加すれば部員同士で友達をつくれます。お気軽にご参加ください。

夏合宿 2022　実施報告

はじめに・実施概要

主企画者　71 期総務

1．合宿概要

行き先　西山陰

日程　A：08/20-22　B：08/27-29　C：09/03-05

コロナ禍が始まって以来というもの、どこのサークルも宿泊を伴う合宿活動は中止を強いられてきた。我々地理部もそのうちの一つである。「地理部2月合宿 2020」を最後に、２年以上合宿を行えていなかった。コロナ禍は 1 年以上経っても消えないもので、その間何度か合宿活動を再開させようかと議論をするも、乱高下を繰り返す新規感染者数に行く手を阻まれてきた。それが今年 2022 年の春、感染者数が落ち着きだすと同時に、政府や大学の出す行動制限も緩和されるようになると、2 年半ぶりの地理部合宿に兆しが見えてきたのである。しかし、「クラスターを起こさない」という至上命題がある以上、コロナ禍以前のような合宿に戻るわけにはいかなかった。そこで役職者内で何時間にもわたる議論を交わし、ようやく合宿再開の決定にこぎつけた次第である。

そうして生まれた「夏合宿 2022」は、前例のない大規模なものとなった。ここ数年の部員数急増に対応する形で、同行程の合宿を計3日程開催する運びとなり、合計の参加者数はのべ 100 人を超えた。また合宿の運営を担う総務も地理部合宿を経験したことがない世代だという問題もあった。合宿当日まで、また合宿中も、幾度となくトラブルが発生することになったものの、無事に全 3 日程を完遂することができた。伝統ある地理部合宿をこうして復活させることができ、非常に誇りに思う。

２泊３日の合宿の行程を以下で紹介する。合宿に参加された方も、今回参加が叶わなかった方も、ひと夏の地理部の青春の様子を、楽しみながらご覧いただければ幸いである。

2．参加者名簿

3 日程合計のべ 102 名。

・A 日程37 名

68 期　1名、69期　18名、70期　8名、72期　10名

・B 日程32 名

70 期　8名、71期　10名、72期　14名

・C 日程33 名

69 期　7名、70 期　5名、71 期　6名、72期　15名

3．行程概要

・前哨戦(1 日目)

前哨戦集合　長門本山駅 07:30

宇部新川駅周辺観光

・本隊 1 日目

本隊集合　新山口駅 10:40

1α(山口線分隊)

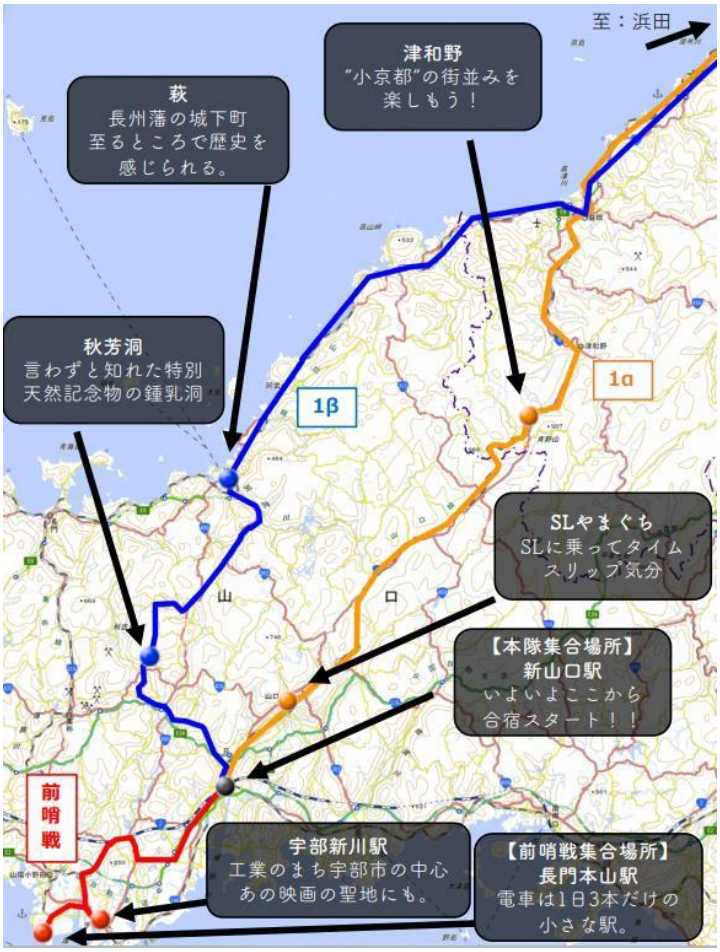
山口駅周辺観

光津和野観光

1β(美祢萩分隊)

秋吉台・秋芳洞観光

萩観光



浜田市内宿泊

東横 INN 浜田駅北口(A,B,C 日程)＆ビジネスホテル末広(B,C 日程)

・本隊 2 日目

2α(山陰本線分隊)

温泉津観光

仁摩サンドミュージアム観光

石見銀山観光

2β(三江線分隊)

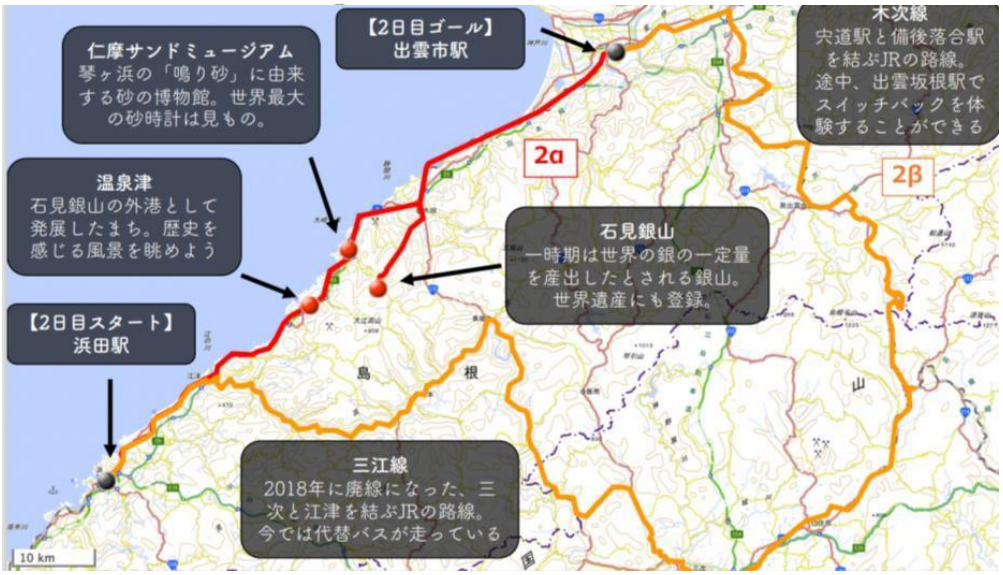
三江線代替バスルート

芸備線・木次線

宍道湖散策

出雲市内宿泊

HOTEL ながた(A,B,C 日程)＆ホテルエリアワン出雲(A 日程)＆東横 INN 出雲市駅前(B,C 日程)



・本隊 3 日目

3α(出雲松江分隊)

出雲大社観光

松江市内観光

3β(安来分隊)

足立美術館見学

広瀬観光

本隊解散　米子駅 15:15

・延長戦(3 日目)

境港観光

延長戦解散　境港駅 18:10

1 日目前哨戦

文責　　71 期総務

1. 分隊長

A：71 期総務　　B：71 期総務　　C：71 期部長

2. 参加者

・A 日程 16 名

70 期　9名　71期　　3名、72期　4名

・B 日程13 名

70 期　3名、71期 5名、72期　5名

・C 日程9 名

70 期　3名、71期　2名、72期　4名

行程

長門本山駅　0730 集合

長門本山 0704 着と 0729 着の長門本山支線に接続

長門本山 0735→宇部新川 0806(JR 小野田線普通)

宇部新川駅周辺散策

宇部新川 0919→宇部 0931(JR 宇部線普通)

宇部 0935→新山口 0958(JR 山陽本線普通)

3.行程紹介

※筆者はB 日程で前哨戦に参加したため、B 日程の記録を中心に記述します。

「2月合宿 2020」以来、約2年半ぶりの合宿活動となった「地理部夏合宿 2022」。そんな記念すべき本合宿の集合場所となったのは、山口県山陽小野田市に所在する JR 長門本山駅。 1日に3往復しか走らないことで有名な JR 小野田線長門本山支線の終着駅であり、そのアクセス性の悪さから鉄道ファンを中心として一定の知名度を持つ。そんな当駅を合宿の集合地としたのは、一部の部員からはとてもウケがよかった。

どの日程でも、前哨戦参加者の多くは、近くの宇部新川駅周辺に前日の宿を取っていたようだ。特に当駅近くの快活CLUB宇部中央店を利用した部員は特に多く、前日の夜からCLUB内で顔を合わせたり一緒に店周辺の工場地帯を散策したりと盛り上がっていた。

ここからついに、2年半ぶりとなる地理部合宿の始まりとなる。主企画としては、非常に感慨深く思うところがあった。

図 1　長門本山駅(前哨戦集合)

無事に長門本山駅で集合した一行は来た道を引き返し、宇部新川駅で列車を降りた。宇部新川駅は、2021 年に公開された映画『シン・エヴァンゲリオン劇場版:Ⅲ』に登場したため、当作品の

聖地的な扱いを受けている。宇部新川では１時間余りの自由行動時間をとった。

当自由行動の目玉は駅南に広がる UBE 株式会社(旧宇部興産株式会社)の関連施設である。全長約30kmにも及ぶ宇部興産専用道路が有名であるが、一般人である我々もその入口までは自由に立ち入ることができた。道中は、化学工業特有の工場景観を楽しむことができた。パイプが縦横無尽に張り巡らされた工場群は非常に見応えがある。図２の夜の景色と図３の日中の景色を見比べるのも一興であった。

宇部新川駅周辺を散策した後は、宇部線に乗車して新山口駅に向かった。新山口駅で本隊集合となる。始発の東海道山陽新幹線で東京からやってくる部員を中心に、本隊合流者を新山口にて拾い、ここからは本合宿の本隊行動となった。

図　3　　朝の宇部新川駅周辺

1α　山口線分隊

文 責　71 期総務

1.分隊長

A:71 期総務 B:71 期総務 C:71 期部長

2.参加者

・A 日程　15 名

70 期　5名、71期　5名、72期　5名

・B 日程　14 名

70 期 2名、71期 7名、72期 5名

・C 日程　8 名

70 期 1名、71期 1名、72期 6名

3.行程

新山口 1114→山口 1139(JR 山口線普通)山口駅周辺観光＆昼食休憩

山口 1402→津和野 1517(JR 山口線普通)津和野観光

津和野 1656→益田 1746(JR 山口線普通)益田 1825→浜田 1918(JR 山陰本線普通)

4.行程紹介

※筆者は A 日程で参加したため、A 日程の記録を中心に記述します。

朝 10 時。東京から来た部員、前旅から接続してきた部員、前哨戦から来た部員……日本各地から集まった部員が新山口駅に集合しました。そして、我々1α 分隊は、1β 分隊と別れ、そのまま山口へと向かう列車に乗り込みました。

赤い山口線の列車に揺られること 25 分。県庁所在地の玄関口としてはやや小ぶりな、山口駅に到着しました。山口駅で分隊内での自己紹介をして解散したのち、昼食をとりつつ、五重塔と季節ごと　に異なる風景を楽しめる瑠璃光寺や、山口県政の歴史を学ぶことのできる山口県政資料館、庵野秀明展をしていた山口県立美術館など、思い思いの場所で滞在時間を過ごしました。

その後は、再び山口線に乗り込み、津和野へ向かいました。当初、1α 分隊は、SLやまぐち号を利用して山口線を走り抜ける予定でしたが、合宿全ての日程を含む期間で運休していたため、これに乗ることはかないませんでした。個人的には、またSLやまぐち号に乗って旅を

してみたいところです。

雨が降る中、津和野駅に到着。津和野駅は無人駅ではありましたが、多くの観光客や併設された小さな観光案内所、そして駅前にはD51の展示もあり、賑わっていました。

津和野では、江戸時代の街並みや街道の広さがそのまま残る、殿町通り、本町通りといった大小さまざまな通りや、太鼓谷稲成神社や津和野城址といった津和野藩の歴史的な施設を各自楽しむことができました。また、駅の向かいの店で自転車をレンタルすることができたので、それを利用することで、少し駅から離れたところにある森鴎外の生家と博物館も楽しむことができました。

その後は、また山口線に乗り込み、津和野から益田経由で浜田に向かい、浜田の東横インへとチェックイン。断続的に強い雨が降り、運行状況が心配されましたが、無事に宿に辿り着くことができました。

1β美祢萩分隊

文責　　71 期総務

1. 分隊長

A：70 期総務　　B：70 期編集　　C：71 期総務

2. 参加者

・A 日程 14 名

70 期　8名、71期　2名、72期　4名

B 日程 15 名

70 期　4 名、71 期　3 名、72 期　8 名

・C 日程 18 名

70期　　3名、71期　5名、72期　10名

3. 行程

新山口駅本隊集合 1040

新山口駅 1107→秋芳洞 1144(防長バス)

秋芳洞・秋吉台観光＆昼食休憩

秋芳洞 1500→萩バスセンター1603(防長バス)

萩市内観光

東萩 1814→益田 1933(JR 山陰本線普通)

益田 1948→浜田 2036(JR 山陰本線普通)

4. 行程紹介

※筆者はC 日程で 1β分隊に参加したため、C 日程の記録を中心に記述します。

新山口駅での本隊集合には、無事に全員集まることができた。分隊行動を始める前に、まずは参加者の自己紹介の時間を取った。そこでは「新山口までどうやって来たか」を各参加者に尋ねて回ったが、東京から始発の新幹線でやってきたという回答のほかには、九州を数日間周遊してからやってきた部員やフェリーを楽しんできた部員などがいた。千差万別の行程で集合したようである。

自己紹介でお互いを知った後は、1β分隊は防長バスに揺られて美祢市の秋芳洞バスターミナルを訪れた。1β分隊最初の目的地である。ここで 3 時間の昼食兼観光の時間を取った。

まずは皆秋芳洞に向かった。秋芳洞は日本最大規模の鍾乳洞として有名である。後述する秋吉台の地下100～200mにあり、約1kmの観光路を辿ることができる。洞内は非常に広大で、長い年月をかけて作られた自然地形の造形美を楽しむことができた。とくに「百枚皿」という場所は、棚田を想起させるような地形で、印象に残った。

図　1 秋芳洞の入口

図　2 百枚皿

秋芳洞の観光路を通り抜け黒谷口に出てきた一行は、さらに秋吉台へ足を進めた。C日程では

秋芳洞内と秋吉台とを結ぶエレベーターが工事中で利用することができず、20 分ほど余計に歩かなければならなかったのが残念であった。

秋吉台は、日本最大級の広さを誇るカルスト台地で、石灰岩の白い岩肌が多く露出している。何億年前という時代には、ここ秋吉台は海であり、そこにあったサンゴ礁が石灰岩に変質していった。それを繰り返し、石灰岩が海から山へと堆積しながら移動し、ついにはその厚みは 500～1000m にも及んだ。そしてそこに雨水が流れて石灰岩が溶けていき、現在あるカルスト地形となったのである。石灰岩でできたこのカルスト地形は水による浸食が激しいのが特徴で、鍾乳洞が作られていく過程で地表が陥没する。そうしてできたのが、地面がすり鉢状にへこんだドリーネという地形で、秋吉台にはいたるところに存在している。複数のドリーネが成長して繋がったものをウバーレ、さらにウバーレが巨大化して低地となったものをポリエと呼ぶ。

図 3　秋吉台のカルスト地形

図　4 正面に見えるのがドリーネ

３時間滞在した秋吉台・秋芳洞を後にし、防長バスに乗って次は萩を目指した。萩市は、日本海に面する山口県北部にある市で、江戸時代には毛利氏が治める長州藩の本拠地となった城下町であった。そのことから、松陰神社や松下村塾、明倫学舎など、幕末から明治維新にかけて活躍した長州藩の志士たちに関連する史跡が数多くあり、萩の人気の観光スポットとなっている。また古い

街並みの保存運動が盛んで、同市内には重要伝統的建造物群保存地区(重伝建)の指定を受けている地区が４か所も存在しており、これは京都市・金沢市と並んで国内最多の数である。

そして萩市内で約２時間の自由行動時間を取った。しかし、萩市内の観光スポットは集約的でないため、それらをすべて回ることは難しく、どこかの地区に絞って観光をした部員が多かった模様だ。しかし、中には萩城下町、堀内伝建、浜崎伝建の３か所を回った者や、指月山に登りに行った者もおり、地理部員として頼もしい限りであった。

図　5 明倫学舎の内部

図　6 萩城下町の街並み

図　7 菊ヶ浜

そして、東萩駅に再集合した後は、山陰本線を東へ進み、２時間余りで１日目の目的地浜田に到着した。

2α 山陰本線分隊

文責　　71 期総務齊藤

1. 分隊長

A： 70 期総務　　B： 70 期庶務　　C： 70 期総務

2. 参加者

・A 日程 20 名

70 期 11 名、71 期 5 名、72 期 4 名

B 日程 20 名

70 期 5 名、71 期 7 名、72 期 8 名

C 日程 19 名

70 期 5 名、71 期 4 名、72 期 10 名

3. 行程

浜田 0730→温泉津 0808(特急スーパーまつかぜ 6号)温泉津散策

温泉津 0957→仁万 1010(JR 山陰本線普通)

仁摩サンドミュージアム見学

仁万 1227→大田市 1240(JR 山陰本線普通)

昼食休憩

大田市駅 1402→世界遺産センター1435(石見交通バス)

石見銀山観光

大森代官所跡 1653→大田市駅 1719(石見交通バス)

大田市 1804→出雲市 1843(JR 山陰本線普通)

4. 行程紹介

※筆者はC 日程で 2α分隊に参加したため、C 日程の記録を中心に記述します。

2日目は島根県西部の浜田からスタートです。浜田駅07時20分集合という夜型人間には厳しい要求ではございましたが、無事に全員起床できたようです。優秀ですね。まずは、浜田 07 時半発の特急スーパーまつかぜに乗り込んで、温泉津に向かいます。温泉津までは 40 分ほど揺られましたが、1日目の疲れもまだ残っていたのでしょうか、結構な割合の部員がすやすやと眠りに入っていました。

2α分隊最初の訪問地となる温泉津(ゆのつ)。その名の通り、日本海の港町に面している温泉街です。温泉津の開湯は非常に古く、1300年前とされています。この温泉津が大いに繁栄したのは主に江戸時代です。地図で見ればわかる通り、温泉津湾は湾入に富む内湾の天然の良港となっており、それゆえに、江戸期に石見銀山の積出港としての機能を有していました。そのため、同地は世界遺産「石見銀山遺跡とその文化的景観」の登録を受けました。また同時に、その歴史ある温泉街の街並みは保存が進められており、国の重伝建にも選定されています。日本に数多ある重伝建の中でも、「温泉町」としてカテゴライズされているのはここだけです。

この温泉津では約1時間半の自由散策時間を取りました。温泉津の街並みや温泉津湾は駅から徒歩圏内にあるため、歩いてゆっくりと散策することができました。C日程の一部数名はまず温泉津湾の方を歩いた後、温泉津の温泉街へと向かうルートを取りました。穏やかな温泉津湾を地理部員と歩くのは、とても心地がよかったなと思い返します。その後、

Figure 1　温泉津のマンホール

道をどんどんと進んでいくと、舗装路は途切れ、未舗装の道(？) のような道が現れます。Google map 上で

は、ちゃんと道として描かれているので、ちゃんと道らしいです。その道を進むと、明らかに山道のような様相を呈してきました。しかし、また同じ道を戻るのも億劫なので、強行突破。朝っぱらから明らかに汗だく状態になりました。そんな大変な思いをしてたどり着いた温泉街は、昔ながらの街並みがよく保存されていて、見ているだけで癒されました。部員有志で、温泉街の中でも名湯とされる薬師湯という温泉に入浴しました。温泉は 45℃ぐらいはあるのではないかと疑わせるほどに熱く、入るのに苦労しましたが、非常にいいお湯でした。

Figure2　沖泊の景色

Figure 3　道なき道を進む地理部員

温泉津の散策を終えた後は、再び山陰本線に乗車し、３駅だけ進み、仁万駅で下車しました。仁万での目的地は、仁摩サンドミュージアムです。

仁摩サンドミュージアムは、世にも珍しい砂の博物館。「鳴り砂」で知られる近くの琴ヶ浜にちなんで 1991 年にオープンしました。ミュージアムの一際目を引く建物は、当地出身の世界的な建築家、高松伸氏が設計した総ガラス張り大小６基のピラミッドです。館内は砂のオブジェや世界の砂が常設展示されており、目玉は世界最大の一年計砂時計「砂暦（すなごよみ）」。高さ5.2m、直径 1m のガラス容器に入った容量１トンの砂がたゆまず、悠久の時を刻んでいます。その他、サンドブラスト（４色のグラスに模様や文字を刻む）や、バーナーワーク（ガラス棒をバーナーで溶かしてキー

ホルダーやストラップを作製)、クリアーキャンドル(３種類の器にロウを流してつくるキャンドル)などのガラス工芸体験ができました。地理部員も、ここでしか体験できない砂遊びを満喫しているようでした。

Figure 4　仁摩サンドミュージアム

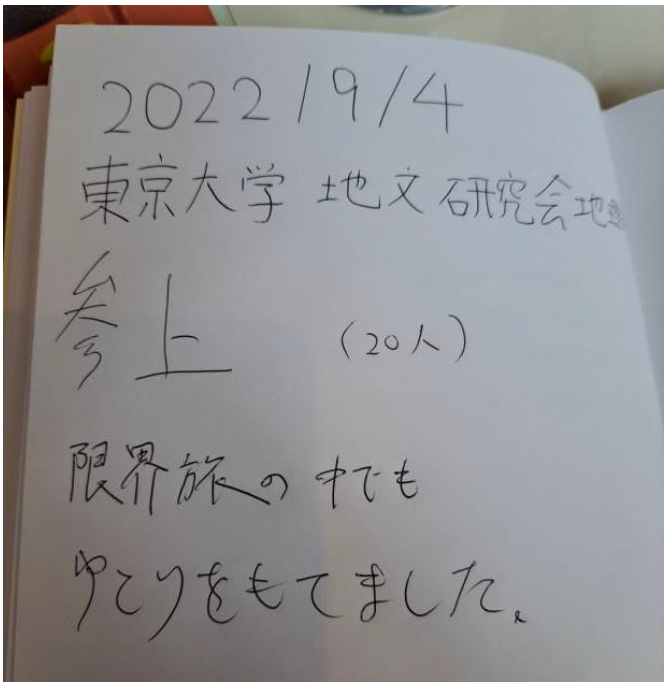


Figure 5　何らかが書かれた

Figure 6　琴ヶ浜

また、この仁摩サンドミュージアムの近くには琴ヶ浜という少し変わった砂浜があります。そこを歩くと「キュッキュッ」と音が鳴るのです。その琴ヶ浜へ一部の参加者が足を運んでいました。鳴き砂を体験できたほか、みんなで海に浸かったりして、間違いなく夏の思い出として刻まれる場所になりました。

その後、大田市駅周辺で昼食休憩を挟み、バスに揺られて2α分隊のメインといえる石見銀山エリアへと向かいました。世界文化遺産にも登録されている西山陰随一の観光地です。石見銀山は、代

官所ゾーン、銀山ゾーン、武家・商家ゾーンの 3 つに大きく分けることができます。大森代官所を中心とした代官所ゾーンでは、鉱山町の歴史ある街並みが今でもよく残されており、重伝建に登録されています。銀山ゾーンでは、龍源寺間歩や清水谷製錬所といった採掘・製錬の遺跡、信仰を集めた佐毘売山神社などで、今でも往時の姿がしのばれます。武家屋敷と町家が軒を接した武家・商家ゾーンでは、当時の面影を感じることができるほか、羅漢寺五百羅漢では安置された 500 体もの羅漢像を見ることができます。ただ石見銀山のエリアは非常に広大で、２時間の自由時間ではすべてを歩いて回ることができないため、レンタサイクルを使って効率的に回りました。

Figure 7　かつての坑道の一つ　龍源寺間歩

Figure 8　清水谷製錬所跡

Figure 9　重伝建でもある大森の街並み

2β　三江線分隊

文 責　71 期総務

1. 分隊長

A:71 期総務　B: 71 期総務　C: 71 期部長

2. 参加者

・A 日程　12 名

70 期　5 名、71 期　2 名、72 期　5 名

B 日程　9 名

70 期　1 名、71 期　2 名、72 期　6 名

C 日程　7 名

71 期　2 名、72 期　5 名

3. 行程

浜田 0634→江津 0700(JR 山陰本線普通)

江津駅 0706→石見川本 0820(石見交通バス江津川本線)

石見川本 0900→道の駅グリーンロード大和 1000(大和観光バス川本美郷線)

道の駅大和 1040→三次駅前 1158(備北交通作木線)

昼食休憩

三次 1302→備後落合 1421(JR 芸備線普通)

備後落合 1441→宍道 1737(JR 木次線普通)

宍道湖散策

宍道 1817→出雲市 1836(JR 山陰本線普通)

4.行程紹介

※筆者は A 日程で 参加したため、A 日程の記録を中心に記述します。

α分隊に先行することおよそ 1 時間。早い時間でしたので、全員が無事に集合できるか心配でしたが、全員揃って浜田駅から江津駅へ行く列車に乗り込めました。A 日程は前日の雨の影響で、本分隊の実施が危ぶまれましたが、乗る予定だった列車の運行状況に問題がなかったため、実施できました。

江津駅からはひたすらバスを乗り継いで行きます。2018 年に廃止された三江線。そのルートとほぼ同じルートをバスは走っていきます。途中、三江線の橋梁や駅舎、三江線名物の一つだった江の川の風景などを見て、部員は時折歓声を上げ、スマホを取り出して写真を撮りながら、バスは進んでいきます。

バスに揺られること1時間強。石見川本駅跡に到着しました。駅舎やホーム、駅付近の線路は廃線後も残されており、間近でその様子を見ることができました。駅舎の中で自己紹介等をした後、解散して各自で周囲を散策しました。線路跡に沿ってしばらく歩くとトンネルだったものと、錆びついたレールが残されていました。写真のように、生い茂った植物に覆われていました。廃線から 4 年半ほどでこのような状態になっており、その植物の生命力には感嘆いたしました。

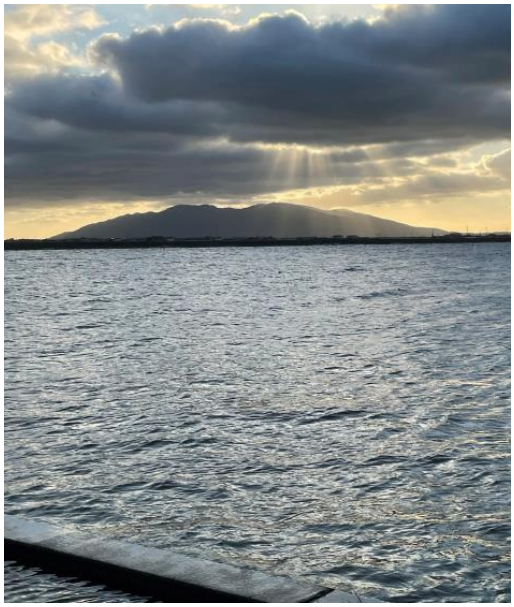
さて、バスに再び乗車し、グリーンロード大和という山あいの道の駅に向かいます。バスはもう地理部の貸切状態でした。時折見える線路跡や駅があったことを窺わせるバス停の名称、江の川の景色などを満喫しながら、道の駅に到着しました。カフェと売店が併設された小さな道の駅でしたが、中国山地を行き交うライダーがちらほら観測されました。こちらでは、ポポージェラートという謎のスイーツを購入。1 人また 1 人と購入し、みんなで写真を撮り、食べ、山間での時間を楽しみました。

バス内での島根の大学の方との出会いもありつつ、三次駅に到着。昼食をとり、次は備後落合駅へ向けて芸備線に乗っていきます。農村の風景が流れていき、山間を走り抜け、時折木の枝が列車にぶつかる音に驚き、次第に深くなる山を進んでいくと、そこに備後落合駅がありました。18 きっぷシーズンということもあったのでしょうが、周りに何もない秘境駅とは思えないほどの人出で、驚きまし た。

そして、木次線に乗り換え、宍道駅を目指します。おろちループのような圧巻の景色や、みんな大好き出雲坂根駅のスイッチバック、どこぞの島のような名前の駅、そして停車時間中での蓋札（マンホールカード）回収などを堪能し、木次線を北上していきました。

宍道駅では宍道湖を眺めに行きました。宍道湖畔に着いた時間帯は、小屋のある場所や道路だったと思しき場所にも水が満ちていました。すぐ目の前に水が広がり、夕暮れ時の神々しさをも体感できる宍道湖の景色は圧巻でした。景色を眺める間に飛行機が近くに飛来するなどのイベントもあり、楽しい時間を過ごせました。

その後、電車から夕暮れ時の山陰の景色を眺めつつ、出雲市駅に無事到着し、各々の宿へと分かれて行きました。



3α出雲松江分隊

文責　　71 期総務

1. 分隊長

A： 71 期総務　　B： 70 期庶務　　C： 71 期総務

2. 参加者

・A 日程 21 名

70 期　7 名、71 期　6 名、72 期　8 名

B 日程 20 名

70 期　4 名、71 期　7 名、72 期　9 名

C 日程 18 名

70 期　3 名、71 期　3 名、72 期　12 名

3. 行程

電鉄出雲市 0803→川跡 0811(一畑電車)

川跡 0815→出雲大社前 0826(一畑電車)

出雲大社参拝

出雲大社前 1022→松江しんじ湖温泉 1122(一畑電車)

松江観光＆昼食休憩

松江 1431→米子 1508(JR 山陰本線普通)

4. 行程紹介

※筆者はA 日程で３α分隊に参加したため、A 日程の記録を中心に記述します。

3日目は島根県の出雲市からスタートとなった。集合場所は一畑電鉄の電鉄出雲市駅。JRの改札からは少し離れた場所にあるこの駅だが、部員の皆さんは迷うことなく集合できたようであった。川跡駅での乗り換えを挟んで、08時26分に無事出雲大社前駅に到着した。出雲大社では、1時間50分ほどの自由行動とした。有名なしめ縄は本殿ではなく、隣接した敷地の神楽園にあることを知らず戸惑う部員が少なからずいた。

出雲大社前駅を10時22分に出発し松江に向かった。宍道湖北岸を走る一畑電車、その車内にはしまねっこのぬいぐるみが備え付けられていた。

松江しんじ湖温泉駅には11時22分頃到着し、自由行動とした。執筆者は６月頭の試験休みで松江を訪れていた上、兼サー先の業務が山積していたので出雲そばをいただいた後松江駅で作業を行っていたが、部員らは国宝松江城、堀川遊覧船、竹島資料館、宍道湖などを巡ったようだ。

松江駅には14時20分頃に再集合し、今回の合宿で度々お世話になった山陰本線に乗車した。途中の安来駅で 3β 分隊が乗車し、無事合流を果たすことができた。米子駅には15時08分に到着し２・３番線ホーム鳥取・岡山寄にて一本締めをし、解散となった。

3β 安来分隊

文責　　71 期総務

1. 分隊長

A：70 期総務　B： 71 期総務）C：70 期総務

2. 参加者

・A 日程 10 名

70 期　6 名、71 期　2 名、72 期　2 名

B 日程 7 名

70 期　　3 名、71 期　1 名、72 期　3 名

C 日程 6 名

70 期　　2 名、71 期　2 名、72 期　2 名

3. 行程

出雲市 0749→安来 0900(JR 山陰本線普通)

安来駅 0920→足立美術館 0940(免費シャトルバス)

足立美術館見学

足立美術館前 1129→広瀬バスターミナル 1137(安来市イエローバス米子＝広瀬線)

広瀬散策(月山富田城など)＆昼食休憩

広瀬バスターミナル 1410→安来駅 1436(安来市イエローバス観光ループ線)

安来 1459→米子 1508(JR 山陰本線普通)

4. 行程紹介

※筆者はB 日程で 3β分隊に参加したため、B 日程の記録を中心に記述します。

3β安来分隊は、その名の通り安来市内の観光地を巡る分隊である。まずは、２泊目の宿をとった出雲市駅から、山陰本線に1時間ほど揺られて安来駅へやってきた。

当分隊の最初の目的地は足立美術館で、安来駅から無料シャトルバスに乗車して向かった。足立美術館は、1971 年に地元出身の実業家足立全康が開館した美術館で、130 点にも及ぶ横山大観作品のコレクションと日本庭園が有名である。特に日本庭園は日本庭園ランキングで 19 年連続で日本一を獲得しているほどの一級品だ。

足立美術館の入場料は大学生料金で1800円とやや値が張るものの、それだけのお金を支払ってでも見学する価値のある美術館であったと感じている。日本画については、私自身あまり造詣が深いわけではないが、巨匠たちが見せる筆致の奥深さの数々にぐっと魅せられるところがあり、じっくり見入ってしまう作品がいくつもあった。日本画は一律撮影禁止で、本稿でお見せすることができないが、興味のある方はぜひ訪れてほしい。また、日本庭園もこれまた素晴らしいものであった。５万坪にもわたる面積を誇る庭園は、まるで”生きた絵画”のようで、背後に見える遠くの山々を借景として取り込んだその造形美は秀逸である。どこからカメラのシャッターを押しても、絵になる美しさがそこにはあった。

足立美術館を見学した後は、安来市広域生活バスであるイエローバスに乗車して広瀬地区に向か

った。広瀬は、後述する月山富田城の麓の城下町として発展した歴史を持つ。ここで昼食兼観光の時間として２時間半ほど滞在した。

昼食は、城跡の麓にある道の駅でそばをいただく部員が多かった。とてもおいしかった。

その後は、有志で月山富田城への登城を試みた。戦国時代に山陰を統べた尼子氏が本拠を構え、尼子氏の栄枯盛寂の歴史が刻まれた場所である。標高 191.5m の月山山頂に本丸を置く当城は、天然の地形がふんだんに活かされており、難攻不落の要塞城との呼び声も高い。

この月山富田城を攻略するには、麓から往復90分の時間が必要とされているが、我々は行程の都合上60分ほどしか滞在できなかったので、かなりハイペースでの登城となった。道中は、やはり難攻不落の山城なだけあって、勾配のきつい坂が続き、一行はかなり息を切らしていた。しかし、汗だくになりながら、それだけの苦労をして登った本丸からの景色は、それは素晴らしいものであり、安来市内を一望することができた。その景色にすっかり見とれてしまい、わざわざ急いで登った甲斐があったなと感じた。本丸にて黄昏るのも束の間、すぐに下山を開始し、なんとか帰りのバスに間に合った形となった。

再び広瀬からイエローバスに乗車して安来駅に戻った後は、山陰本線車内にて3α分隊と合流して、本隊解散の地である米子駅を目指した。長くもあっという間であった３日間にわたる本隊の行程はこれにて幕を閉じた。本隊解散では、合宿参加者の約半数が離脱することとなった。これからは延長戦となる。

3 日目延長戦

文責　　71 期総務

1. 分隊長

A：71 期総務　　B：71 期総務　　C：71 期総務

2. 参加者

・A 日程 19 名

70 期　11 名、71 期　5 名、72 期　3 名

B 日程　13 名

70 期　3 名、71 期　6 名、72 期　4 名

C 日程　11 名

70 期　4 名、71 期　3 名、72 期　4 名

3. 行程

米子 1531→境港 1622(JR 境線普通)

境港観光

水木しげるロード、境漁港など

境港駅前　18:10 解散

4. 行程紹介

※筆者はA 日程で延長戦に参加したため、A 日程の記録を中心に記述します。

本戦は米子駅にて無事終了し、部員はそれぞれ特急やくも、鳥取方面の列車、高速バスなどに乗車した。延長戦に参加する部員は構内の端、0 番線に停車する列車に乗り込み、境港を目指した。米子と境港を結ぶ境線には漫画『ゲゲゲの鬼太郎』のキャラクターが描かれたラッピング車

両が投入されており、我々が境港まで乗車した列車は「ねこ娘列車」と「ねずみ男列車」が併結されていた。車内アナウンスやシートのモケットも『ゲゲゲの鬼太郎』仕様となっていたのだが、乗客の大半は地元の方々だったために少々アンバランスな情景が生まれていた。

境港駅には 16:30 頃に到着し、その後は自由行動となった。部員は各々自由に周辺を散策していたようだが、B日程では、「ベタ踏み坂」として有名な江島大橋に自転車で到達した部員もいたようである。

18:00頃に再集合し、記念写真撮影後、延長戦は解散となった。途切れる線路、行く手を阻むようにそびえる境水道と美保関の山は、旅の終着点としてふさわしい情景を作り出していた。引き続き境港を観光する部員に見送られながら、我々は境港を後にした。

おわりに

文責　　71 期総務

以上、3日程に及んだ3日間の夏合宿 2022 の全貌をお送りしました。地理部の合宿活動を再開させようと動き出したものの、夏前には新型コロナの新規感染者数がうなぎ上りを始め、実施に向けての雲行きが怪しくはなりましたが、最終的にはなんとか開催の望みをかなえることができました。そして、のべ 100 人を超える地理部員の皆さんの当合宿への参加を出迎えることができたことを心から嬉しく思います。

この合宿の遂行には、総務や分隊長をはじめとして、多くの方々のご協力あってこそのものでした。特に 71 期部長には、絶大なるバックアップを最初から最後まで全面的に行ってもらいました。運営に携わってくださった役職者の皆さん、またすべての参加者の皆さんに、心の底から感謝の意を申し上げます。

こうして地理部の合宿活動の伝統は無事に復活を果たしましたが、一方でコロナ禍における合宿活動をめぐる様々な課題も浮き彫りになりました。今回の実施で露わになった反省点は、しっかりと原因と対策を突き詰め、次期 72 期総務に引き継がなければなりません。今後も、めまぐるしく変わる情勢の中で、難しい判断が時には要求されることもあるかと思いますが、信頼のおける仲間と共に議論を重ねて素晴らしい地理部合宿を今後も開催することを祈るばかりでございます。

末筆ではございますが、今回の夏合宿の参加を通して、学生時代の青春の1ページを刻むことができたのならば、主企画者の私としてはうれしいことこの上ありません。ぜひ、今回合宿に参加された方も、参加されなかった方も、次回の地理部合宿にご参加いただければ幸いです。

最後までお読みいただきありがとうございました。

本厚木巡検

企画者: 71 期広報･副地図帳　/ 71 期部員

1. 巡検概要

実施日程： 2022 年 2 月 28 日（月）・3 月 5 日（土）・3 月 22 日（火）

参加者

69 期：2 名

70 期：6 名

71 期：10 名

行程

本隊約 7.7 km、延長戦約 2.3 km となった。

==========
厚木駅<**集合**>/13:55
↓　1.7 km
三川合流/14:35
↓　1.1 km
厚木中央公園・厚木市役所/15:00-15:10
↓　1.0 km
本厚木駅/15:40
↓　1.9 km
ふじみ公園/16:15
↓　2.0 km
厚木アクスト<**本隊解散**>/17:00-17:15
↓　1.3 km

東名中学校/17:40
↓　0.6 km
円光寺/18:00
↓　0.4 km
愛甲石田駅<**延長戦解散**>/18:10
==========

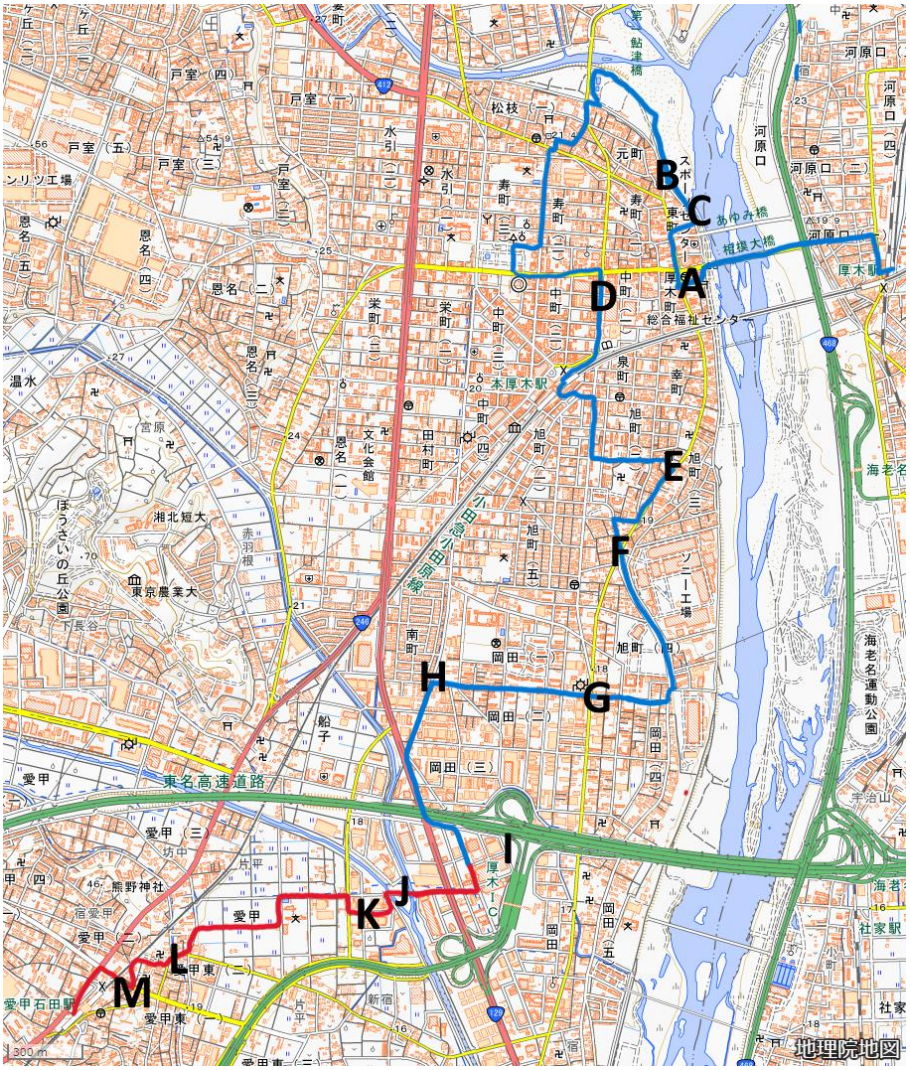


図 1: 行程図(青は本隊、赤は延長戦)

https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html

※3/5(土)の日程はこれよりも 1 時間前倒しとした。これは厚木アクストで連接バスに接続する必要がないためである。

※A~M の記号は「4. 本隊報告」と「5. 延長戦報告」で示すために便宜的に振ったものである。

※左の画像は、国土地理院 地理院地図より作成したもの。

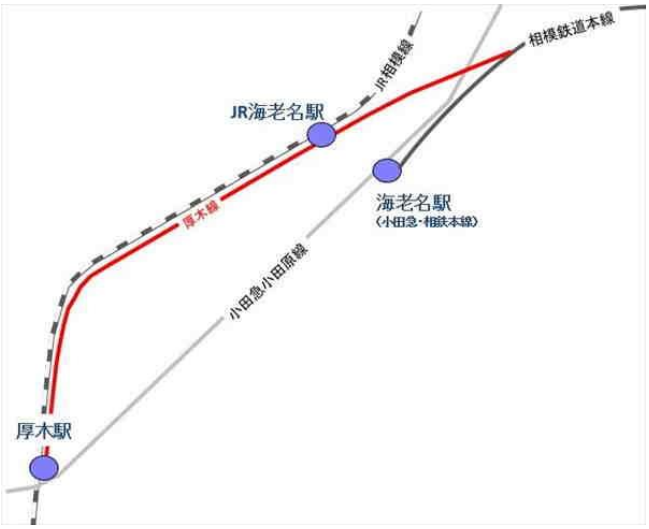
2. 訪問した地域の概要

神奈川県央に位置する厚木市は、約 20 万の人口を擁し、大山街道に沿って栄えた厚木宿や、東名高速道路の厚木 IC など、交通の要衝として栄えてきた都市である。昼夜間人口比率が 100 を超え県内第 1 位であることや、地方交付税交付金不交付団体となっていることにも見られるように、県央の経済の中心的存在であり、本厚木駅周辺には高いビルや商業施設が立ち並んでいる。また、コロナ下で借りて住みたい街ランキングで 2 年連続 1 位にランクインしており、子育てしやすい街ランキングでも全国 3 位に入ったことがある。市内には大学が 3 校あり飯山・七沢などの温泉街や工業団地まで都市構造がふんだんに見られる街である。今回は厚木市の東部、中心市街地から愛甲石田駅にかけての地域を歩いた。

3. 計画

企画者の 71 期広報･副地図帳が出身地であることから立案。「海老名･厚木巡検(2014 年)」の存在、および後述の「厚木市にない厚木駅」を踏まえて、あえて中心駅である「本厚木」の名称を取り「**本厚木巡検**」とし、厚木市内を中心に訪問する行程にした。その後、71 期広報･副地図帳が 71 期部員を勧誘、共同企画とした。

4. 本隊報告



はまれぽ.com「普段は乗れない！　相鉄線の貨物線『厚木線』に乗車レポート！」https://hamarepo.com/story.php?story_id=5541 より。厚木駅周辺の路線の関係。

[A], [B]などは、「1. 巡検概要」の地図中の位置を表す。

集合は厚木駅の跨線橋を渡った東側とし、ここで厚木駅についての説明を行った。この厚木駅は海老名市にあるが、これにはこの付近の鉄道の延伸の歴史が関連している。厚木駅に伸びてきた最初の鉄道は、神中鉄道(現在の相模鉄道)の二俣川～厚木間及び、相模鉄道(現在の JR 相模線)の倉見～厚木間である。当時は海老名村よりも厚木の方が大きい街だったから厚木の名を取ったという説や、当時 JR 相模線は相模鉄道が、現在の相模鉄道は神中鉄道が経営しており、相模川を超える橋を建てる費用がなく仕方なく対岸を厚木駅としたという説がある。その後、海老名駅が開業し神中鉄道のターミナル駅が海老名駅に移ることとなった。1943 年には相模鉄道が神中鉄道を吸収合併し、その直後もともとの相模鉄道の部分が国有化され、相模鉄道が旧神中鉄道の路線のみを持つこととなり現在に至る。

厚木駅裏の相鉄の線路。(2021/11)

JR 相模線厚木駅の横の複数の線路は現相模鉄道のもので、車両の運搬のため使われていて時々相鉄の車両がおかれている場面を目撃することができる。この相鉄の厚木駅までの路線は相模鉄道厚木線と呼ばれ、相鉄が最初に厚木駅に乗り入れたことが分かる名称となっている。

相模鉄道(旧神中鉄道)は 1964 年まで海老名～本厚木間で小田急に乗り入れていたため、相鉄の本厚木駅直通復活、さらには相鉄延伸の要望すらあるが、実現性は両社の過密ダイヤや工事費を含め見通しが立っていない。

厚木駅を出発し、相模川をまたぐ相模大橋を渡って厚木市に入り、厚木神社[A]に訪れた。ここは現在位置に移転する前に厚木市役所が置かれていた場所だが、その由来は烏山藩厚木役所であったようで、そのことを示す石碑が置かれていた。

厚木神社を出発し、県道601 号沿いに歩く。この通りは昔は大山街道(正式名称は矢倉沢往還)であり、厚木宿として栄えた古くからの中心地である。そのため、シャッターに綺麗な絵が描かれていたり、創業が 19 世紀以前の店が散見されたり、現在の相模大橋周辺の地区は厚木市内でも地域区画が小さく分かれたりしている。

昔からの中心部は、本厚木駅周辺にやや勢いを持って行かれている。(2021/11)

厚木宿の北端部。この写真の左側に厚木の渡しの説明がある。隣の消防団のシャッターの鮮やかな絵は大山街道の厚木宿をイメージしたものと思われる。(2022/2)

[C]地点の碑。じょう橋の説明がある。(2021/11)

厚木宿の北端[B]には、厚木の渡しがあったことを記す碑がある。大山街道の厚木宿と隣の国分宿(現海老名市)との間では船で相模川を渡る必要があった。明治初期に相模川を渡す相模橋が完成した際には、常設の橋という意味でじょう橋と呼ばれたようである([C]地点に碑あり)。この相模橋は現在のあゆみ橋の位置にかかっていたが、その後 1953 年に現在の位置に相模大橋が開通すると撤去され、代わりに相模橋のあったところには相模小橋という沈下橋が置かれた。さらにその後、1996 年にあゆみ橋となった。相模大橋は厚木市と対岸の海老名市を結ぶ橋の 1 つで、通行量が多かったため、あゆみ橋も設けることで交通量を分散させることを図ったのではないだろうか。

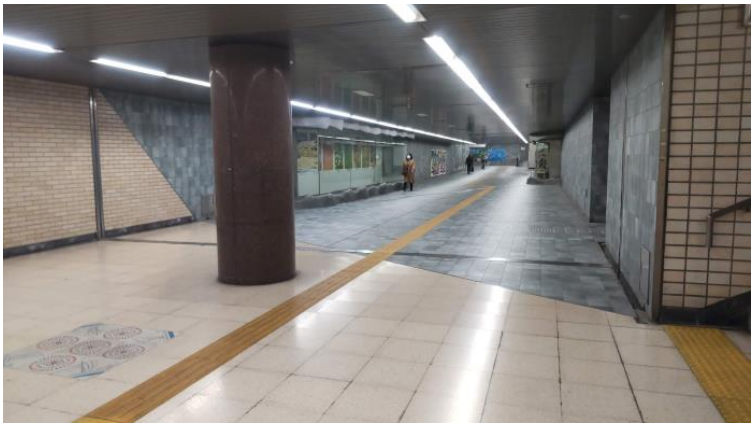
三川合流部(上) (2021/11)
河川敷から下流を望む(下) (2021/3)

厚木の渡しの近くで、相模川は中津川、小鮎川と同時に合流する。この三川合流地点では、毎年あつぎ鮎まつりという大規模な祭りが開かれている。厚木市は相模川で獲れる鮎を売りにしていて、「あゆコロち

ゃん」というマスコットキャラクターもいる。三川合流地点で自己紹介とし、晴れていた A,B 日程では川沿いで水切りなどをして楽しんだ。

三川合流地点からは南下を続け、厚木中央公園に到着した。厚木中央公園は昔はフッ素工場であったことが公園内の説明板に書かれている。道路を挟んで隣には厚木市役所があり、ここで「2. 訪問した地域の概要」で記したような厚木市の概況を述べた。

厚木中央公園を出発し、ほどなくして本厚木駅東口地下道に到着した[D]。正式名称を厚木中町地下道線という。厚木市は市内の公共交通機関をほぼバスに頼っているため、厚木バスセンターと厚木市の玄関口である本厚木駅を結ぶことが主な目的とされた。その後厚木バスセンターからさらに延伸して今に至る。参加者から、バスセンターの出口付近で内装が変化しているのが延伸の証拠ではないかという意見が上がった。



本厚木駅東口地下道内部。右側の階段はバスセンターに繋がっているが、内装の境界は延伸の痕跡か？（2022/3）

本厚木駅東口地下道を出ると本厚木駅の東口や北口に繋がっている。本厚木駅は 15 万人の乗降客がいて、実際に巡検で訪問した時も駅前は人で賑わっていた。ここでは、本厚木駅の接近メロディーとして小田急線海老名駅とともに 2010 年からいきものがかりの曲が使われていることを紹介した。これはいきものがかりの出身が厚木市と海老名市であることによる。実際、北口駅前広場は昔いきものがかりが路上ライブをしていたようだ。ここで休憩とした。

本厚木駅南口。（2021/11）

休憩を終えると本厚木駅の南口に出た。

南口は最近再開発が行われ綺麗に整備された。ちなみに南口にはファミリーマートが2軒隣り合っている(同じ店の別館などではなく、別々の店舗)。

本厚木名物隣接ファミマ。(2021/11)

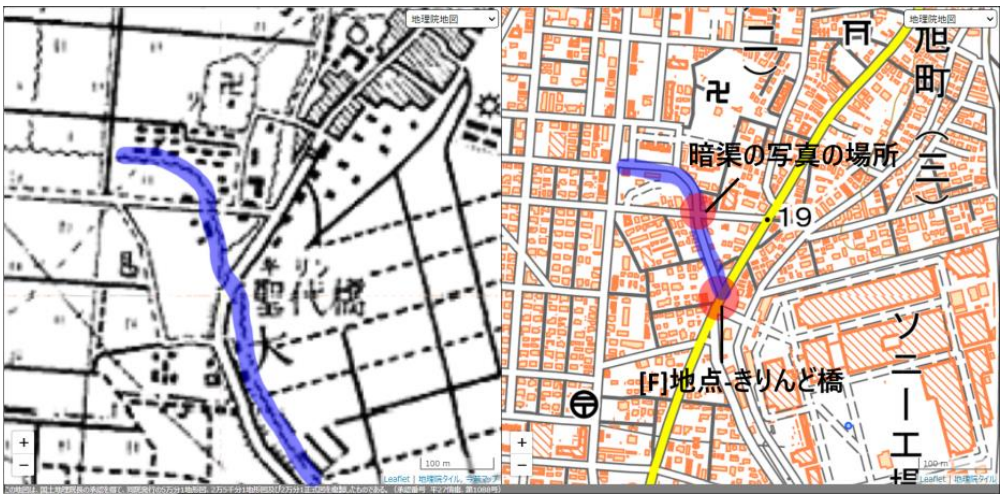
南口からしばらく東に進むと、大山街道にぶつかる所に熊野神社がある([E]地点)。境内には銀杏があり、樹齢 500 年と推定されていて市の指定天然記念物になっている。この辺りは古くから熊野の森と言われ、厚木に滞在した渡辺崋山もこの森を描写していたようだ(熊林の暁鴉)。

そこから南下して少し進むと、水路跡が現れる。車道のようになっているのにポールで遮られている道や、歩道が縁石で区切られ家の裏口が繋がっている道があり、かなり分かりやすい。少し進むと[F]、「きりんど橋」の碑があり。そこには「聖獣きりんが出るところだから『きりんで橋』、転じてきりんど橋」とある。今昔マップを対照するとやはりこの通りに水路が通っていたことがわかる。

暗渠。参加者撮影。(2022/3)

この水路に沿って南下すると、左手に SONY の工場が見られ、右手には帯状のふじ

[F]地点の碑。きりんど橋。(2021/11)



地図は、時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」((C)谷　謙二)により作成したもの。https://ktgis.net/kjmapw/
青線部などが昔の川。暗渠ときりんど橋の碑の写真の撮影場所も記した。奥に大山が見える。(2022/2)

み公園という公園が見られるようになる。ここで少々休憩とした。さらに少し進むと、正面に大山がよく見えるまっすぐな道に出た[G]。用途地域の指定としては、この道路の左側(南側)は準工業地域、右側(北側)は第二種中高層住居専用地域や第一種住居地域などである。北にある本厚木駅から延びてきた住宅街と、厚木 IC の方から延びてきた工業地域がぶつかる境界とも言えるだろう。ただし、その境界はうっすらと感じられる程度であり、明確に分かれているわけではない。

この道路のあった付近は昔は水田地帯であり、道に直交する水路の跡が何本か見られた。さらに、道を進んだ先で突き当たるより太い道路[H]は田村堀通りといい、これも田村堀と呼ばれた水路の跡である。田村堀は正式には田村用水というもので、小鮎川に水を仰ぎ、前半に訪れた厚木中央公園の西をかすめて、この通りを南下し、現平塚市の田村というところまで流れていた。昭和 5 年に改修され、中津川から取水する昭和用水という用水になり、1995 年から 2002 年頃に埋められ今の姿に至る。

田村堀通りを南下し、国道 129 号沿いに進むと、本隊解散場所の厚木アクストに到着した。厚木アクストは東名高速道路の厚木インターチェンジに隣接するビジネスタワーである。1995 年に政府のテレコムタウン構想に基づいて竣工された⑥が、バブル崩壊後ということもあり、当初は入るテナントも少なく赤字が続き、2005 年には民事再生法の適用を受けることになったそうだ。それでも、入居する企業は徐々に増え、本厚木駅との間の人の往来が非常に盛んになったため、2008 年 2 月から本厚木駅との間で平日朝夕に連接バスが運転されている。平日日程で延長戦に参加しない場合は、これにちょうど乗ることができるような時程であった。

夕日に　連接バス。平日朝夕のみ。(2021/11)

周囲を見ると、厚木アクストのみならず、厚木 IC 付近には様々な企業や商業が立地していることが分かる。近くにある中丸公園[I]の竣工記念碑には、「この辺りは相模川の右岸に広がる平坦な肥沃地で、古くは土地改良事業も行われた田園地帯であったが、1968 年に厚木 IC が開設されることになると、交通の要衝という立地条件を積極的に活かし、土地利用転換を計画的に行うために委員会を立ち上げ……」ということが書いてある。最初の厚木宿から始まり、この厚木 IC に至るまで、厚木市が交通の要衝として発達してきたことが分かったところで、本隊を解散とした。

5. 延長戦報告

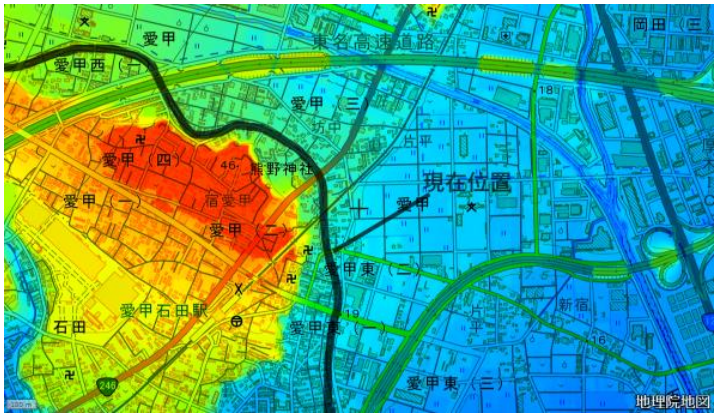
厚木アクストを出て西に進むと、玉川と恩曽川の合流地点[J]にたどり着いた。ここまでの道は狭いわりに車通りが多く、進むには注意が必要だった。合流地点には大相模水神社という小さなお社がある。ここでは毎年「田植えの季節に向けて五穀豊穣などを祈る通水式が行われ」⑨ているようである。

石井平理事長之像(大相模水神社)(2022/2)

大相模水神社の中には「昭和用水合併記念之碑」が建っている。この昭和用水は、本隊の最後の方で歩いた田村堀の改修後の用水路である。碑文によると、昔の用水は玉川、小鮎川、渋田川と湧き水から水源を取っていたが、元から水量が少ない上に関東大震災でほぼ断絶状態になってしまったので、県が救済策として大正 14 年から改良を行い、取水口を中津川に変更して昭和 5 年に工事を終えたようだ。昭和用水の建設に尽力した人の像もあった。

大相模水神社を出発し、倉庫群[K]を歩いた。厚木 IC 付近という立地を生かして物流の拠点を置いているのだと思われる。しばらく進むと東名中学校の前に出た。昭和 44 年開校で、これは東名高速道路ができた後である。高速道路の影響の大きさが感じられる。この付近は市街化調整区域となっているため田園風景が広がる。

田園風景(2022/2)



国土地理院　地理院地図より加工。
https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html
巡検時に見せた資料。「現在位置」と指示しているのが[L]地点で、黒い線が玉川の旧流路である。

愛甲石田駅のペデストリアンデッキ。(2022/2)

市街化調整区域を抜けると再び大山道に戻り、旧玉川の上を橋で渡った[L]。大相模水神社の付近でも見た玉川は、現在は直線的な流路となっているが、昔は台地の縁を沿うように流れていたため、その跡の暗渠を橋から見ることができる。もちろん橋自体も昔の水路の痕跡と言える。

旧玉川が沿っている台地は相模川の作った河岸段丘の西側に当たると考えられる。円光寺と大厳寺という2 つの寺院の間の坂を上り、台地を実感した。

一方で、この坂の入口辺りから、厚木宿の隣である愛甲宿が大山道沿いに広がっていたとされる。現在も宿愛甲商工振興会というのぼりや、宿愛甲という交差点名([M]などでみられる)にその跡がある。巡検では、坂を上った後で宿愛甲の交差点に出て、これらの愛甲宿の跡を確認した。

宿愛甲から北に進み、小田急線の線路を越えると愛甲石田駅の北口に到着した。すぐそばに伊勢原市との市境があり、伊勢原市側は石田、厚木市側は愛甲という地名になっている。ここで延長戦は解散となった。

6. 良かった点と反省点

概ね良くまとまった巡検になったと思う。厚木アクストから先は道が細かったが、先導も問題なく行うことができた。

反省点を挙げるとすれば、ふじみ公園から厚木アクストまでのルートである。実は 2 回目の下見(2/15)の時に、ふじみ公園から南にまっすぐ進むと相模大堰管理橋という

最初の下見では工事中であった。(2021/11)

相模大堰管理橋。歩行者も渡れる。(2022/2)

橋が存在することに気付いた。1 回目の下見の時は道が工事中であったため断念し、2 回目の下見の時は既に承認を得ていたため変更が困難だと判断してしまったが、最初に工事の終了時期などを確認してこちらに進むことも検討しておくのが良かったかもしれない。

また、些末な写真をたくさん撮っていたのに、きりんど橋周辺の暗渠や田村堀などの重要な場所の写真を撮っていなかった。巡検で訪問した土地の様子を記録することは大事なので、今後は忘れずに行いたい。

7. 参考文献

① 「普段は乗れない！　相鉄線の貨物線『厚木線』に乗車レポート！」はまれぽ.com https://hamarepo.com/story.php?story_id=5541

② 「相鉄グループ 100 年史」相鉄グループ https://www.sotetsu.co.jp/about/history/

③ 「両市をつなぎ 20 年 あゆみ橋が 2 月 1 日で」タウンニュース https://www.townnews.co.jp/0404/2016/02/05/319405.html

④ 「本厚木駅東口地下道 イメージアップへ実証実験 ソニー㈱、㈱リコーも協力」タウンニュース
https://www.townnews.co.jp/0404/2016/04/01/326966.html

⑤ 「用途地域マップ」メタウェアリサーチ https://cityzone.mapexpert.net/

⑥ 「田村堀の開発と番水制の成立要因」増野途斗，岡澤宏，中村好男（2008）
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jjsidre2007/76/7/76_7_619/_pdf/-char/ja

⑦ 「厚木アクスト」Wikipedia
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8E%9A%E6%9C%A8%E3%82%A2%E3%82%AF%E3%82%B9%E3%83%88

⑧ 「平成 8 年版 通信白書」郵政省, 128 ページ
https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h08/html/h08a02020308.html

⑨ 「実の秋を祈り　大相模水神社で通水式」タウンニュース
https://www.kanaloco.jp/news/life/entry-166488.html

⑩ 「大山街道見どころマップ」国土交通省 関東地方整備局 川崎国道事務所
https://www.ktr.mlit.go.jp/kawakoku/kawakoku00027.html

その他、厚木市内各所の説明板、碑文等(じょう橋、厚木中央公園、熊野神社、きりんど橋、中丸公園、大相模水神社等)

8. 最後に

情報が一部怪しいところもありそうです。特に Wikipedia の記事を参考文献に入れてしまった部分……ただ、出典も記された記事で、インターネットで調べた限りは大きく間違ったことは書いてなさそうです。ネットニュースの引用も同じく。

湘南クッキー自販機。厚木市内にも所々にある。巡検では愛甲石田駅前の自販機を通った。(2021/11)

謎のブランコ。元町児童公園にて。(2021/11)

あゆコロちゃんガスタンク。厚木ガスにて。(2022/2)

ふじみ公園。早咲きの桜が見られた。参加者撮影。(2022/3)

一等水準点。ふじみ公園にて。(2021/11)

編集後記

我々72 期編集の初仕事となる作品ですし、サークルオリエンテーション当日の午前 4 時 25 分までかけて作っているのでぜひ隅々までお読みください。~~時間掛かってるのは私が Adobe に弱いのと同社に課金してないだけなんですけどね。~~そして、こういう記事がもっと読みたい、書いてみて誰かに読んでもらいたい、書いてあるような巡検・合宿に参加してみたい、と思った方については、新歓巡検や語る回でお待ちしております！　え、「そもそも地文って何だし」？

72 期編集　芝田

LONGRUN2023 新入生歓迎号　第 72 巻 1 号
2023 年 4 月 03 日発行
編集:72 期編集（3 名）
発行所:東京大学地文研究会地理部
〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1 東京大学教養学部学生会館 309　TEL03-5454-4343

Longrun

Societas Scientiarum Terrae Caelestisque Pars GEOGRAPHIAE